

# 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (2)

—青年期の家族関係—

小林 麻子\*・稲越 孝雄\*\*・会沢 信彦\*\*\*

## Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (2) — Family Relationships During Youth —

Asako KOBAYASHI, Takao INAKOSHI, Nobuhiko AIZAWA

### 1. 問題と目的

子どもを産んだ女性は母親と呼ばれる。ところが、この「母親」という言葉には大きなイメージが付いている。山村は常識的知識としての母親の観念を「母のコンセプションズ」と呼ぶ。母のコンセプションズとは、一定の社会における母親の「定義」であり、母という社会的範疇についての社会の成員に分有された暗黙の前提である（山村, 1978）。しかし、母のコンセプションズは現実の母親から生まれたものではない。明治期、育児が国家事業となる中で、歴史上の人物の母親を引用するなどによって、母親の役割は美化、正当化されてきたのである（横山, 1986）。

母親の観念は現代になっても健在で、「家庭の教育力の低下」「親の果たす本来の役割」といった言説が今なお多くの人に受け入れられる。しかしながら、美化された母親像は、現実の母親が抱える問題を覆い隠す。問題は母親の能力の問題として片付けられてしまう。

母親を取り巻く環境は厳しい状況にある。核家族化によって母親は孤立し、育児の経験的知識や技術が世代間で伝達されなくなってしまった。少子化によって子どもと接する機会を持たず、自分の産んだ子どもが初めて経験する子どもである母親も少なくない。赤ん坊を抱く姿もぎこちない母親が、地域社会との繋がりもなく、親元からも離れた場所で、たった一人育児書を頼りに子どもを育てているということは決して稀ではない。

本研究は、家族の中に生まれた子どもが成長し、結婚、出産、育児を経て母親になっていく過程をたどりながら、家族との関係や葛藤、あるいは相互作用のプロセスなどを、図式的投影法を用いて把握しようとするものである。

図式的投影法は、行動科学と現象学の統合という観点に立って、体験と意識といった主観的世界を含む人間全体にアプローチしようと水島恵一により考案された、概念領域からイメージ領域

\* こばやし あさこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

\*\* いなこし たかお 文教大学名誉教授／東京成徳大学非常勤講師

\*\*\* あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

を含んだ投影法である（水島, 1979）。

前報（小林・稲越・会沢, 2009）では、母親の原家族の中での体験、家族認知について分析を行った。本稿では母親の青年期を扱う。幼少期・児童期を経て青年期、母親の家族認知はどのように変化していくのか、両親に対してはどのような感情を抱いているのか把握するとともに、母親の作成した図式に投影されている言語化されていない家族認知についても明らかにしたい。そこで、上杉・松尾（1980）の分類基準に基づき分析を行う。上杉らは、家族枠内の“私”の位置（家族内私認知）が、他の家族に対する近さ・遠さの認知と結びついているとして、家族枠の中心からの距離に応じて“私”駒を5つの群に分類し、父母との距離や感情イメージの調査を行っている。

今回の調査では図式的投影法の「家族関係単純図式」と「カード式自己像単純図式」を使用して、青年期の母親の家族の様子と両親に対する感情を語ってもらう。本稿では母親が作成した図式の駒の位置や距離と母親の家族認知、感情との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査協力者

東京の私立保育園の父母会と東京近郊の育児グループに依頼。応じてくれた3歳～5歳の子どものもつ母親8人を対象とした。

### (2) 調査期間および実施場所

実施期間は2000年9月から11月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせてため、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

### (3) 調査方法

#### ① 家族関係単純図式

直径2cmの円形の駒を家族の人数分用意し、家族の構成員の名前を記入する。B5判の白紙縦

表1 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから青年期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと同じ年頃の家族</li> <li>・10歳頃の家族</li> <li>・18歳頃の家族</li> <li>・18歳頃 母</li> <li>・18歳頃 父</li> <li>・青年期の友人</li> </ul>	4 幼児期 (2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかなか寝てくれない</li> <li>・ぐずぐずする</li> <li>・飛び跳ねたり叫んだり暴れたり</li> <li>・私の言った通りやってくれない</li> <li>・かんしゃく</li> <li>・おもらし</li> </ul>
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新婚時代</li> <li>・妊娠を知った時</li> <li>・妊娠後期</li> <li>・子どもが産まれた時</li> </ul>	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第二子以降の妊娠を知った時</li> <li>・第二子以降の出産後</li> </ul>
3 乳児期 (0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて目が合って微笑んだ時</li> <li>・どうしても泣きやまない</li> <li>・私の作った離乳食を食べてくれない</li> <li>・後追い</li> <li>・抱っこ</li> </ul>	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫</li> <li>・子ども(ひとりひとり)</li> <li>・現在の家族</li> <li>・理想の家族</li> </ul>

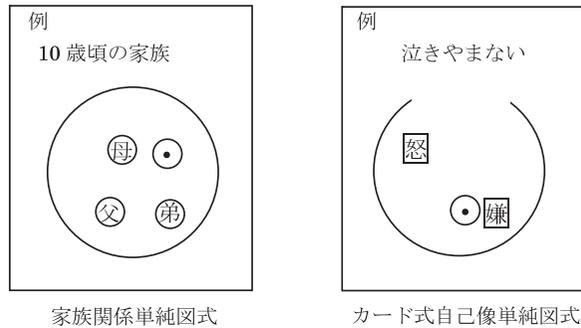


図1 調査で使った図式

に直径10cmの円枠（家族の枠）を作り、家族の駒をそれぞれ自由に移動させながら「ピッタリ」と思える位置に置く。

②カード式自己像単純図式（自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式）

B5判の白紙縦に上部が開いた直系10cmの円枠を作り、円枠の上部2cm上に対象カードを置く。直径2cmの円形の駒を自己の核とし、対象に対して「ピッタリ」と思える位置に置く。さらに感情語（Pultchik, R.の感情8語を漢字1文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」を用いる）が記された2cm四方の感情カードを、その対象に対して配置する。

(4) 手続き

人生のステージごとに質問項目を設定し（表1）、その項目を対象カードとして家族関係単純図式、あるいはカード式自己像単純図式を作成してもらおう（図1）。実験者は被験者に「（対象に対して）駒を自由に動かして、自分がピッタリすると思えたら、そこにのりづけして下さい。」と指示する。図式作成後に当時の家族の様子を語ってもらう。質問は幼少期から現在まで時系列に提示する。面接中の会話は録音し、逐語録を作成した。面接所要時間は平均4時間であった。本稿では、18歳頃の家族（家族関係単純図式）と18歳頃の母、18歳頃の父（カード式自己像単純図式）を対象にする。

表2 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前/現在	調査時の家族
A	30代前	父・母・妹(3歳下)	教員	夫・長男(7歳)・長女(5歳) 次男(0歳)・姑
B	30代前	父・母・弟(3歳下)	看護師/教員	夫・長男(4歳)・次男(2歳)
C	30代中	父・母・弟(4歳下)	会社員/なし	夫・長女(3歳)
D	30代中	父・母・妹(双子)	会社員/会社員	夫・長女(4歳)
E	30代前	父・母・妹(3歳下) 弟(8歳下)	会社員/なし	夫・長男(3歳)・長女(3歳) *双子
F	20代後	父・母・長兄(4歳上) 次兄(2歳上)・祖父・祖母	職歴なし	父・母・次兄・長女(3歳)
G	30代後	父・母・弟(3歳下)	会社員	夫・長女(3歳)
H	20代後	父・母・妹(3歳下)	会社員	夫・長女(4歳)・長男(2歳)

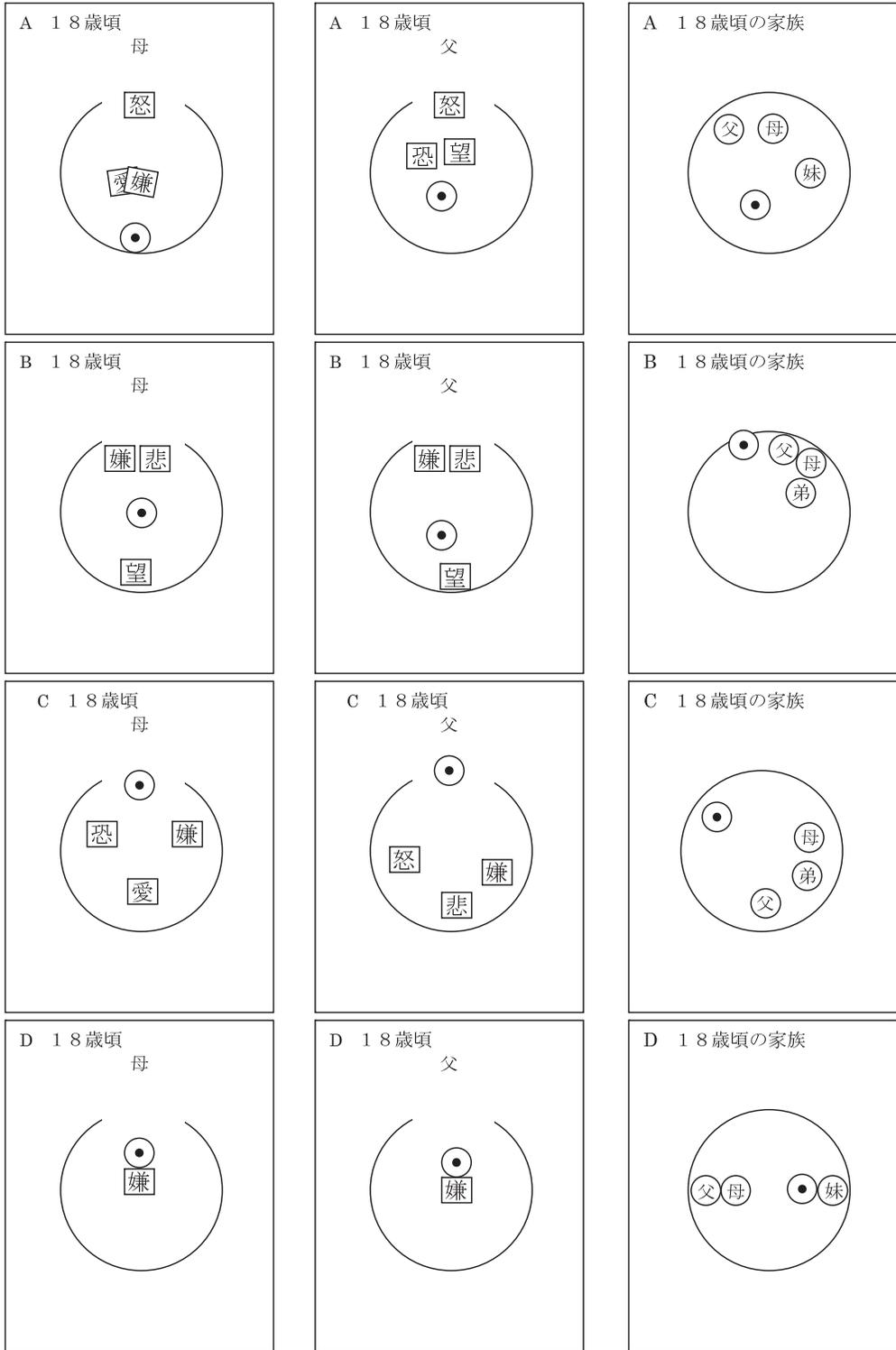


図 2-1 母親の作成した青年期の父母、家族に対する図式

表 3-1 青年期の母親の両親に対する感情・家族認識

		感情カード	家族の様子
A	母	怒、嫌、愛	怒られている。一番下にいるのは、とにかくそばにいたくない。つまらないことではいっぱい怒られた。この頃、母親が絶対的でなく、一人の人間として見えてきた。子供の意思より自分の考えを押しつける。世間体を気にするタイプだというのが見えて、「どうしてそうなの」という思い。お母さんだからいなくては困るけれど、この頃は嫌の方が上にあった。
	父	怒、恐、望	うるさかったから、嫌だなという思いがすごくあった。怒りは私が怒られている。常に怒られている。それに対してお父さん怖い。その一方で、父はすごい読書家で博識。一目置いていたから憧れみたいな思いがある。自分のやりたいことに対しては、自分の責任でやれ、やりたいならやりきれという感じ。
	家族		一歩引いて見ている。妹の高校入試でもめている。私と妹もちょっと離れて。お姉ちゃんは私の気持ちなんてわからないのよっていう感じだった。父親を批判する母。家族はバラバラのこととしてたけど、私には家族よりも大切なものがいっぱいあったが、別にこんなものかなって。この頃家には居たくなかったかな。居てもいいけど自分の部屋に居た。
B	母	嫌、悲、望	(嫌) 帰宅時間や、彼氏についてうるさかったから、めったにしやべらなかつた。(悲) 友達と同じようにさせて欲しいのに、何でわかってくれないのかな。(望) もっとおおらかになつて欲しい。いろいろなことに。
	父	嫌、悲、望	(嫌) 口数も多くないし、うるさく言わないし、怒りもしない感じ。どの気分かと言ったら嫌だなと思う頃。(悲望) 友達は親に何か買ってもらったと言っているのに、何でうちは買ってくれないのかなって。あんまり父親に関心はなかつた。
	家族		個々になつてきた。お互いに口をきかない。それぞれがそれぞれの生活をしてたかもしれない。早く家を出たかった。家は窮屈。
C	母	恐、嫌、愛	とにかく口やかましい時期。母だから言ってくれているんだと思うが、聞いているのが面倒くさい。母は口が強いので。反抗するようになったのは社会人になってから。恐ろしくて出来なかつた。(愛) そういうのがあるんだろうと思いつつ。母は子供の意思を尊重するより、自分の理想を言ってくるタイプだったかもしれない。
	父	恐、嫌、悲	父に悩みを相談しても、聞いているのかいないのか、答えが返ってこなかつた。進路の相談をした時「自分で決めなさい。私はお金払っているんだから」と言われて、すごく冷たいと思って怒りが。自分のことを考えてくれないと感じた。父は帰宅するとずっと一人で本を読んでいた。遊んでもらった記憶はほとんどない。自分の世界にいつも入っていた。
	家族		かわいそうにいつも父がこの位置。外の世界が楽しくて(自分は)ちょっと端に寄つてみた。家族は自分の意識の中の半分以下。大学に行き始めてから楽しい時間が広がった。大学入学前は、こっちがやめてくれと言っても母がべったりと干渉してくる方だったかも。
D	母	嫌	反抗期なんだろう。父と母に対して嫌というのがすごく強く出てきて、会話も必要以上のことはしないという感じ。父と母はほとんど考えていることが同じじゃないかと私には取れた。自分は双子の姉と思ったことはないのに、私が家を継ぐとか家から出ないという話をされた。
	父	嫌	
	家族		自分を大人として見て欲しい気持ちが出てきた。でも両親からしたらまだまだ子どもで。自分たちは入りたいと思つていても、両親は自分たちより上にいるので、少し間をあけてみた。

### 3. 結果

調査に協力してくれた母親のプロフィールは表 2 の通りである。また、母親の作成した青年期の父母に対するカード式自己像単純図式と家族関係単純図式を図 2 に、図式の説明の要約を表 3 に示す。

上杉ら (1980) は、家族関係単純図式の分析方法として、円枠内に置かれた自己の駒<sup>◎</sup>の位置を基準とし、円枠内を中心からの距離によって 5 つの群に分類した。分類基準は図 3 の通りである。自己の駒の中心が家族枠の「中心部にある (中心部)」「中間部、又は中間部と中心にまたがる (中間部)」「周辺部から中間にまたがる (周辺部)」「周辺部、又は周辺部と枠外にまたがる (枠)」「中心部・中間部・周辺部すべてにまたがる」となる。

#### (1) 家族枠内の自己の駒の位置

表 4 ①は、上杉らの分類基準をもとに、幼少期 (3~5 歳頃)、児童期 (10 歳頃)、青年期 (18

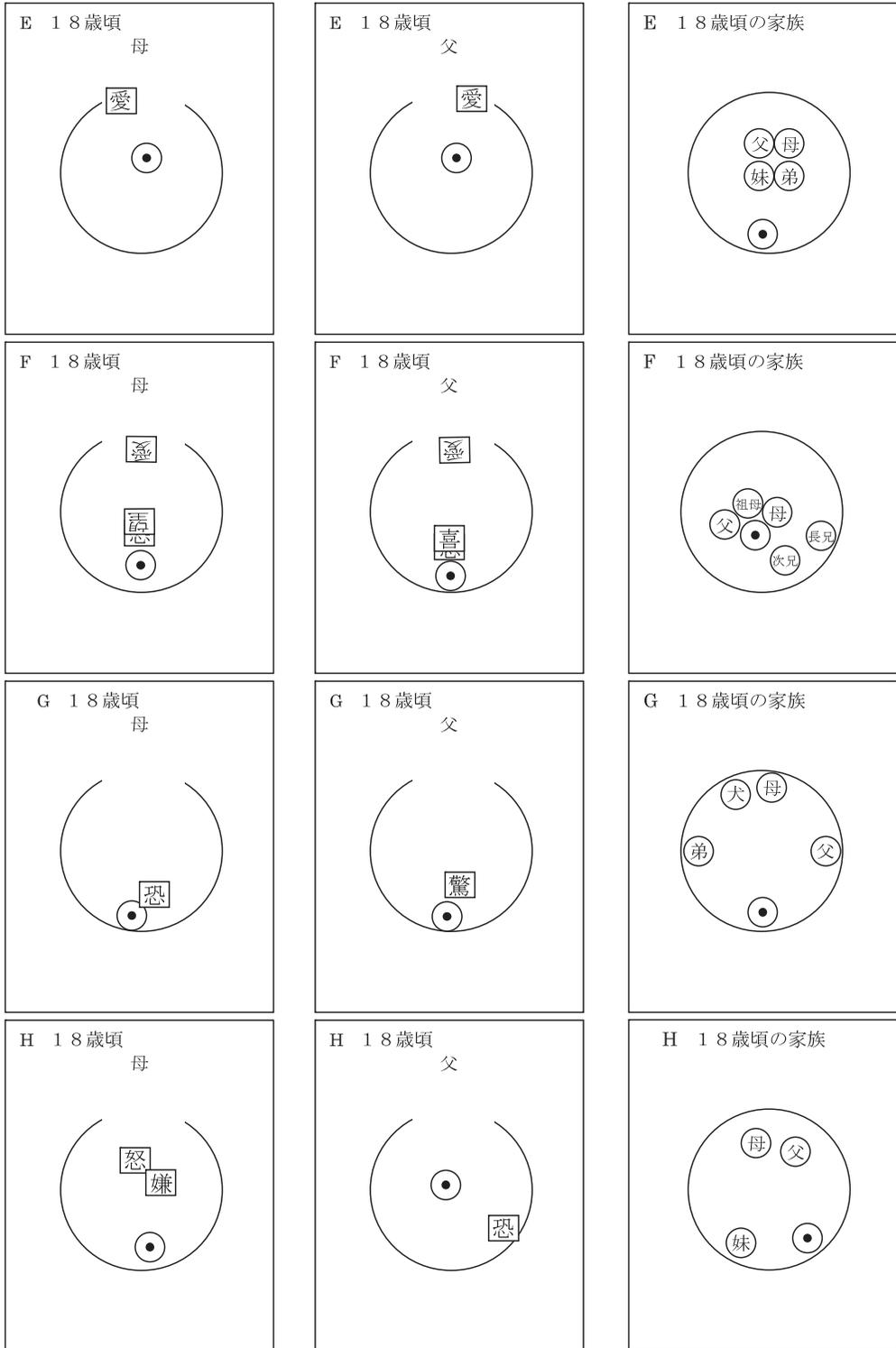


図 2-2 母親の作成した青年期の父母、家族に対する図式（続き）

表 3-2 青年期の母親の両親に対する感情・家族認識（続き）

		感情カード	家族の様子
E	母	愛	(会社の寮に入ったので)ただひたすら心配をしてくれていた。お母さんはお母さんでしかないよね、今でも。何の不満もなかった。困ったときにはお母さんって思っていたから、きっとお母さんの愛を感じていたんだと思う。お母さんはあっけらかん、明るい感じの。こまごまと動くけど、几帳面というのは感じない。
	父	愛	お父さんはお母さんとは違う形だけれども、心配症というか、かわいがってくれた。母は体のこと、父は身の回りなこと（お金とか）を心配してくれた。父は家の中で一番偉い人。怒ると黙ってしまうが恐くはなかった。叩かれるわけでもないし、うるさいことも言わない。
	家族		(自分が) 離れているのは、家を出て寮に入ったという意味。外から家族を見ている気分。寮と家が近かったのでたまに帰りたいと思った。自分の居場所がなくなったとは思わなかったし、いつでも帰れる場所のような感じ。いきなり帰って違和感を感じることはなかった。本当に家族でかける。今でもそう。
F	母	愛、望、恐	自分は母と真正面に向かっていくつもり。私をすごく愛してくれているので私も母に愛情がある。結婚して母の言う幸せをつかみたいという希望、憧れ。母は厳しい人だったので、私の中で甘えた気持ちがあるとそれを見透かされる。必ずしも結果だけで見ない分、そこ間の甘えが許されない人なので怖い。でも憧れもあるので、恐を隠していた。
	父	愛、喜、恐	父もすごくかわいがってくれた。父とも真正面から付き合っているつもりだが、父の方が厳しいので一番奥になる。母同様、私の姿勢を見る人なので恐れもちが奥にある。18歳の時は、父には認めてもらっている喜び。プレッシャーもありつつ、でもうれしい。話をする機会はない。進路のことを時々するくらい。そういう時も「おまえが決めたんならそれでいいだろう」と。本当に好きな道で、それだったらやればいいんじゃないかという感じで、そう取れるように、忙しい中も接してくれていた。いない割には、良い思い出ばかり。
	家族		父ともいろいろ話ができるようになっていた。私のまわりに母と祖母と父が、その時介護が中心だったので祖母をはさんで母と父がいる。2人はつながっているというイメージがある。長兄とは高校の時だけんかして、それ以来距離を置いている。次兄とは大学の時一緒に話し合ったことが多かった。
G	母	恐	ひたすら怖い。いつ怒るか、いつ笑うか、わからない人だった。趣味は同じだったので、友達のような感じもしたけど、権力関係が母親だから恐かった。意見が違うとすごく機嫌が悪くなる。母に嫌われたからといって悲しいというのとはなかった。じゃあ嫌っててど。
	父	驚	本当は謎という字を書きたかった。父がいるとやっぱり自分は、枠の一番離れたところにいたい。どういう人がよくわからないので、気合を入れてなければいけない。理解してどうこうじゃなく、こんなところもある、こんなところもある、全然わからないじゃんっていう。
	家族		みんなそれぞれバラバラで、犬は弟と母の間を行ったり来たり。(私が枠の端にいるのは)真ん中がない。枠は自分のまわりにある。家族も友達もみんな外。適当にいろんな枠が、家族の枠、友達の枠、～の枠が、いろいろな所に出来たり消えたりする。常にある枠は自分のパーソナルスペース。家族という枠がない。みんなバラバラという。弟が友達の家族に憧れて「暖かい家をつくらんだ」とかいろいろ暴言を吐いて。父母は「家が暖かくないって言うの！」弟は「違うんだよ！」って一生懸命説明しようとしていたのを覚えている。
H	母	怒、嫌	この時期一番恐かったし嫌いだ。一番母親から遠いところになっていた。私のためという思いはなく、ただうるさいなっていうことしかなかった。母親の怒りが自分に来て、だから母親が嫌いだ。この時期は母親も泣いていることが多かった。一生懸命育てているのに何でわかってくれないと、ちょっとしたことで感情的になる。
	父	恐	怒ると父親も恐いのだけど、よっぽどじゃないと本当に怒られることはなかった。この頃になると、父親を味方につけているところがあった。それ以外にはあまり父親への感情はない。
	家族		自分と妹の距離が縮まって、共通の話題が出てきた。親には嫌いというイメージがあって、それは父も母もほとんど同等。妹と一致団結して親に抵抗していた。勉強しなさいとか言わない。怒られることが多くて、顔を見たくないという時期。

歳頃)の家族関係単純図式(小林ほか, 2009)の自己の駒の位置を分類した結果である。家族枠内における自己の駒の位置の変化は、全体の傾向として、自己の位置が年齢とともに中心から外に向かっている。幼少期、8人中6人の母親が家族枠の中心部に自己の駒を置いている。児童期になっても、3人が中心部、3人が中間部に置いて、自己の駒の位置が大きく動くことがない。ところが青年期に入ると、自己の駒の位置は家族から離れて枠に近づく。

(2) 自己の駒と父母の駒の距離の変化

表4②では、青年期における自己の駒と父母の駒の距離を児童期のものと比較した結果を示した。8人中6人が拡大していた。Gは幼少期から青年期まで両親と離れたままだった。

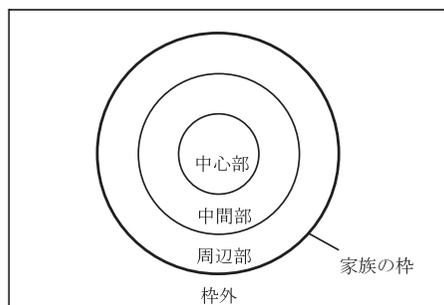


図3 家族関係単純図式の分類基準 (上杉・松尾, 1980)

(3) 父駒と母駒の距離の変化

表4③は、幼少期から青年期の父駒と母駒の距離の変化を示している。幼少期・児童期は離れていたが青年期になって接近する B, E, H に対して、A は近接から徐々に離れていった。F の場合、祖母も含めた3人で概ね近接している。D はどの時期も接触している。C, G はどの時期も離れていた。

(4) 両親に対する感情

表4④では、カード式自己像単純図式で布置された、両親に対する感情カードを提示した。

i) 母親に対して

「嫌」が5人で一番多い。「帰宅時間や交友関係に干渉してくる」「母親の欠点が見えてきた」「母親の価値観を押しつけられる」ことが原因となっている。「怒」は2人。母親への怒りではなく、母親の怒りであった。「恐」は3人。絶対的な権力者である母に対する恐れと、甘えた気持ちがあるとそれを見透かされてしまうという恐れ。「悲」は1人。友達と遊びたいのに許してくれないことに対して。「愛」は4人だが、2人は「いなくては困る」「そういうものがあるんだろうと思いつつ」と消極的なものだった。「望」は2人。母親への要望と、母親に対する希望、憧れであった。「喜」と「驚」はなかった。

表4 母親が作成した図式の駒の位置による分析および両親に対する感情カード

	①家族枠内の自己の位置			② 両親との距離	③父母の距離	④青年期の感情	
	幼少期の家族	児童期の家族	青年期の家族	青年期 両親との距離(児童期と比較)	幼少期から青年期父母の距離の変化	母親に対して	父親に対して
A	中間部	中間部	中間部	拡大	近接→徐々に拡大	怒嫌愛	怒恐望
B	中心部	中心部	枠	母分離、父接近	分離→分離→接触	嫌悲望	嫌悲望
C	中心部	周辺部	周辺部	拡大	離れたまま	恐嫌愛	怒嫌悲
D	中心部	中心部	中間部	接触から分離	接触したまま	嫌	嫌
E	中心部	中間部	枠	拡大(寮に入居)	近接→接触	愛	愛
F	中心部	中心部	中間部	父接近	近接したまま	愛望恐	愛喜恐
G	枠	枠	枠	離れたまま	離れたまま	恐	驚
H	中心部	中間部	枠	拡大	分離→分離→近接	怒嫌	恐

## ii) 父親に対して

「怒」は2人。父親の怒りと、自分に向き合おうとしてくれない父親への怒り。「恐」は2人。お父さんに怒られて怖いというものと、自分を信じてくれる父に応えるプレッシャー。「悲」は1人。自分に関心を向けてくれないことに対して。「嫌」は1人。「今となってはなぜ嫌だったのかわからない」と消極的なものだった。「愛」は2人。とてもかわいがってもらったというもの。「望」は2人。母親と同様に、要望と憧れや尊敬に別れた。「喜」は1人。父に認めてもらえた喜び。「驚」は1人。どういう人なのかわからないというもの。父親に対しては、8つの感情全てが出た。

## 4. 考察

本稿では、母親が作成した図式が、母親の家族認知や感情をどのように投影しているのか検証するために、自己の駒の位置や駒どうしの距離をもとに分析を行った。

表4①から、家族枠内の自己の駒の位置が成長とともに変化していることがわかった。幼少期、自分の駒が家族枠の中心部に布置されたのは、家族の中心に自分がいるという感覚を投影したものと考えられる。青年期になると自己の駒は外側に向かう。意識が外の世界にあることを表している。(A: 家族よりも大切なものがいっぱいあったから。友達とか学校とか。B: 家を出たかった、家は窮屈。C: 外の世界が楽しい。家族は意識の半分以下。)

親駒との距離(表4②)の拡大は、親から分離したい気持ちが投影されているものと考えられる。(A: とにかくそばにいたくない。B: うるさかったからめったにしゃべらなかつた。C: とにかく口うるさい時期。聞いているのが面倒くさい。H: この時期一番うるさかった。一番母親から遠いところにいたい。)

青年期の両親に対する感情(表4③)は、マイナス感情が大部分を占めた。特に母に対しては「自由にさせてくれない」「口やかましい」といった内容が目立った。Steinberg (1989) は、思春期の成熟は、若者と親が距離を置くようになることだと述べる。思春期の成長を経験すると、子どもは親と過ごす時間が短くなり、親との愛着が減少する。親を批判し、親の権威に何の疑問ももたずに従うのは嫌になる。なお、Fの図式にはこうした青年期の特徴はあらわれなかつた。これは、Fが祖母の介護で大変な両親の手助けをしていることや、Fが早く結婚して家に入り、祖母や母のようにになりたいという希望をもっていることと関連しているかもしれない。バウムリンド (2003) によると、両親からの分離は少年に比べ少女の方が困難である。少年に比べ少女は家族と密接で巻き込まれたままのプレッシャーに鈍く、時にはほとんどプレッシャーを経験しない傾向がある。これは、男が働きに出る間、女は家にいるという古いステレオタイプに根ざしている。

父駒と母駒の距離の変化(表4③)について、①接触したまま、②分離していたが青年期に接近、③分離したままの3つに分類して分析を試みたが、全体としてまとまった結論を見いだすことが出来なかつた。しかしながら、両親の距離の変化を③と認知していたCとGは、幼少期、あるいは児童期の時から自己の位置を家族の中央にあるとは認知しておらず、本質的な部分での他の母親との違いを予感させる。

カード式自己像単純図式では、両親に対する複雑な感情が表現された。感情カードに使用されたPlutchikの8つの感情については、受容(愛)と嫌悪、驚きと期待、恐れと怒り、悲しみと喜

びは、同時に存在することができないとされている（松山・浜, 1974）。しかし、今回、母親に対する感情としてAとCが「愛」と「嫌」を同時に布置した。これは、干渉したり価値観を押しつけてくる母親に反発したりうんざりするが、それは、母親をもう愛していないということの意味するのではなく、子ども扱いして欲しくないという、青年期の健全な要求が表れたものだと捉えることができる。今回、母親の両親に対する感情は、圧倒的に否定的なものが多かった。しかし、親からの自律を目指す青年期においては、健全であると言えるのかもしれない。

本調査で、家族枠内の自己の位置が、年齢とともに変化していく様子を明らかにすることができた。幼少期、家族枠の中心付近に位置していた自己は、年齢とともに枠の外側に向かう。自己が枠の周辺部に移ると、両親との距離も広がった。これは、家族枠の周辺部もしくは枠外に自己を認知する場合、中心近くに認知するものと比べ、父・母を遠い存在として認知しているとする上杉ら（1980）らの結果と一致する。また、家族の駒が拡散した5人（A・B・C・G・H）は、家族をまとまりのない状態と認知している。これは、自分と父・母の心理的距離を近くに定位している子どもは、遠くに定位している子どもより、家族をまとまったものと意識しているとする秋丸・亀口（1988）の調査結果と一致する。

両親に対する感情は、E・F（家族をまとまったものと認知している）を除いて否定的なものだった。上杉ら（1980）の調査では、父より母の方がプラスにイメージされていたが、本調査では、母親に対してネガティブな感情が強く表れていた。しかし、家族枠内の自己の位置で分析したものについては、枠の周辺群で、父・母・家族に対して、イメージがマイナスにかたよっており、本調査の結果と一致する。

本稿では、図式的投影法を使い、幼少期・児童期・青年期にわたる母親の家族認知の変化を追った。青年期の傾向としては、家族枠内の自己の位置づけが中心付近から周辺部に移り、両親に対する否定的な感情が前面に出てきた。一般的に、親への強いマイナス感情は、問題とみなされることが多い。しかし、青年期においては、問題というよりむしろ親からの自律を模索する健全な過程であることが示唆された。

## 引用文献

- 秋丸貴子・亀口憲治（1988）. 家族イメージ方による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 2, 61-74.
- バウムリンD, D. (2003). 青年期の家族関係 D.C. キンメル・I.B. ワイナー（編）河村聖・永井徹 監訳 思春期・青年期の理論と実像 プレーン出版 pp.263-325.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦（2009）. 図式的投影法を用いた母親の家族認識（1）— 一原家族に対して — 文教大学生生活科学研究, 31, 285-294.
- 松山義則・浜治世（1974）. 感情心理学1 理論と臨床 誠信書房
- 水島恵一（1979）. 「体験と意識」研究の方法論 体験と意識に関する総合研究, 1, 1-8.
- Steinberg, L. (1989). Pubertal maturation and parent-adolescent distance: An evolutionary perspective. In G.R. Adams, R. Montemayor, & T.P.Gullotta (eds.), *Biology of adolescent behavior and development*. Newbury Park, CA: Sage. pp.71-97.
- 上杉喬・松尾春代（1980）. 「図式的投影法」による家族認知の基礎研究 体験と意識に関する総合研究 2, 100-104.
- 山村賢明（1978）. 日本人と母 東洋館出版社
- 横山浩司（1986）. 子育ての社会史 勁草書房